

平成28年度第1回（経営学・経済学・心理学・数学）グループ合同委員会議事概要
（経営学・経済学・心理学）教育FD/ICT活用研究委員会
CCC数学グループ運営委員会

- I. 日時 : 平成28年7月16日（土）16:00～18:00
- II. 場所 : スクワール麴町 5階 寿
- III. 出席者 : 経営学教育FD/ICT活用研究委員会 佐々木委員長、寺澤委員、青木委員
経済学教育FD/ICT活用研究委員会 林委員長、碓井委員、児島委員、山田委員、
中嶋委員、山崎委員
心理学教育FD/ICT活用研究委員会 木村委員長、松田委員、横山委員、大島委員、片受委員
CCC数学グループ運営委員会 井川委員、白田委員、平野委員
事務局 井端事務局長、森下主幹、中村事務局員

IV. 議事概要

1. 報告・検討の概要

(1) 平成27年度の事業報告

事業報告書により、昨年度開催の分野別アクティブ・ラーニング対話集会の開催結果が報告された。

全体で平成27年度は9つの分野連携グループでAL対話集会を開催し、ICTの活用を含めた効果的な授業マネジメント、学修の仕組み、評価方法等について、501名の参加者と意見交換を行った。

主な議論内容：

「知識の定着と確認に向けたアクティブ・ラーニングの方法」、「地域参加・体験型のアクティブ・ラーニングを実現するPBL授業の工夫」、「ルーブリックによる評価方法」、「教養教育と専門教育との連携の必要性」、「教員相互による教育方針の理解と授業との関連付け」、「授業をファシリテートする仕組み・体制」など。

本質的な課題である「知識の活用・創造に向けたアクティブ・ラーニングの工夫」、「教員の授業科目編成から学位プログラム中心の科目編成への転換」、「教養教育と専門教育の統合」、「教員の意識改革」などの掘り下げた意見交換までには至らなかった。

経営学・経済学・数学グループでは、10月と11月に委員会、12月に対話集会を開催した。

- ・ALについて、初年次教育における数学の価値や連携の必要性が確認された。
- ・PBLについては、地域社会と連携した授業の例が報告され「知識の活用」のイメージはされたが、知識を組み合わせる「知識の創造」までの議論はできなかった。
- ・授業マネジメントに関し、「①学位プログラム」について、教員中心の授業科目編成から、授業科目の統合/調整を伴う学位プログラムへの変更についての問題が認識された。

また、「②教養と専門の連携」についての必要性が確認され、「③ファシリテータ」については、学生の中にファシリテータマインドを作り上げる必要がある、そのためには大学としての仕組みが必要であることが確認された。

心理学は教育学と10月と11月に委員会、12月に対話集会を開催した。

- ・ALについて、(1)学修の進捗状況をモニタリングしながら授業デザインを振りかえる必要、(2)学生の負担軽減を図るためにも、事前/事後学修、シラバス、授業の仕方、反転授業の活用など授業デザインを全体で考える必要性が確認された。また、(3)学生同士が発表し知識定着

を図る重要性が確認され、(4)ルーブリック評価については、レベル基準を分かりやすくする必要が確認された。

- ・ 教学マネジメントに関しては、(1)教養と専門の連携には、教員間の連携が必要であること、(2)ファシリテータに関して、上級生にとっては自分自身を振り返ることができ有効であることが確認された。

他のグループの主な報告

- ・ 社会福祉・社会・統計のグループでは、ALにおける失敗の経験と、失敗から学ぶ態度を身につけることの重要性が確認された。また、現場で学びがどのように行われたかの効果測定の困難さや、PBLにおいて教員はファシリテータに徹し、学生に失敗させ修羅場を経験させる必要性が確認された。
- ・ 政治学・国際関係学のグループでは、価値観の異なる学生と初年次に学び合いをさせることは、「主体性」、「多様性」、「協同性」のコンピテンシーを培う上で重要であることや、ファシリテータについては学内の雇用制度ができないと学生の支援が得られないことが確認された。
- ・ 物理・化学・生物のグループでは、成績上位者が中位者に教え、クラス全体で成績が上がるチーム学習を考えていく必要性と、教養と専門の融合においては専門の教員が教養力を活用す事例などが提示され、教養教育の必要性を理解させる工夫の必要性が確認された。

(2) 平成28年度の活動計画について

資料により、「平成28年度アクティブ・ラーニング対話集会の運営方針」について説明。

AL対話集会の運営方針について：

1. 本年度は昨年度の対話集会得られた議論・確認事項、個々の大学での経験を踏まえ、成功・失敗の要因と改善対策を整理するとともに、分野の壁を越えて知識を組み合わせる創造型教育の必要性、学位プログラムを実現していく上で避けて通れない授業科目の調整・統合、教員の意識改革などの本質的な課題について理解の促進を図ることを目的に以下の7グループに再編成し研究を継続展開する。

- ① 社会福祉学・社会学・教育学・統計学の連携グループ
- ② 経営学・経済学・会計学・心理学・数学の連携グループ
- ③ 機械学、経営工学、建築学、土木工学、電気通信工学、物理学、化学、生物学の連携グループ
- ④ 栄養学、薬学、医学、歯学、看護学、体育学の連携グループ
- ⑤ 英語教育、コミュニケーション関係学の連携グループ
- ⑥ 被服学、美術デザイングループの連携グループ
- ⑦ 法律学、政治学・国際関係学の連携グループ

政治学・国際関係学グループには法律学が加わり分野連携グループで対話集会を開催する。

※法律学分野は、現在取りまとめている「ICTを活用した教養・学際レベルの分野横断型フォーラム型教育モデルを取りまとめ、その後対話集会に参加する。

(3) 確認事項

- (1). 昨年度の対話集会で、アクティブラーニングの必要性について理解・認識は共有できたと思うので、本年度は学生本位の高度な授業を探求する。
- (2). 知識習得型の授業から、知識の活用、知識を組み合わせる新しい価値を見出していく授業へ

切り替えていくことを目指したい。

- (3). 単なるアクティブラーニングではなく、「アクティブラーニングに ICT を活用して授業効果を高める」ことを探求する。
- (4). 10月までに2回の委員会を開催して話題提供、意見交換のテーマ、開催要項を決定し、12月には対話集会を開催する。
- (5). アクティブ・ラーニングに関する意見交換のテーマ（あくまで一例）
 - ・知識の定着を目指したアクティブ・ラーニング（反転授業の進め方と課題）
 - ・知識の活用を目指したアクティブ・ラーニング（参加体験型授業）（問題解決型 PBL 型授業方略）
 - ・知識の創造を目指したアクティブ・ラーニング（異分野交流・知識組み合わせ発想型授業）
 - ・ルーブリック評価・ピア評価の方法と課題
- (6). 教学マネジメントに関する意見交換のテーマ（あくまで一例）
 - ・教員中心の授業科目編成から学位プログラム中心の科目編成に向けた課題整理
 - ・教養教育と専門教育との連携に向けた課題整理
 - ・事前・事後学修過密化による学生負担の軽減策（科目調整を含む）
 - ・アクティブ・ラーニング、反転授業、ICT活用の全学的FD戦略
 - ・ネット上でのファシリテータ活用の方法・体制と養成

2. 本年度の進め方、話題提供・意見交換テーマなどについて主な意見

- ・分野横断型のフォーラムは専門知識が確立されていない学生には困難ではないか。
- ・分野横断型フォーラムの狙いは学生にただ単に知識の習得ではなく、考える力を身につけさせることにあり、学ばなければならない範囲に気づき、学問する上での視点に気付かせるにある。
- ・ネット上でいろいろな分野の人が参加し議論する、マルチディシプリナリーな学問を勉強できることが必要ではないか。
- ・学ばなければならないことに気づいた学生には、必要な科目を揃え、ネット等で学べる仕組みがあるべきではないか。
- ・心理学は経営学、経済学とも相性が良く、いろいろなところで交流ができる。
- ・アクティブラーニングは当たり前となってきているが、日本の大学の科目数を考えると先生方のチームティーチングや学位プログラムの視点から授業科目の集約の必要があるのではないか。
- ・ファシリテーターの課題として、学生ファシリテータを育てる/使うには教員と学生に柔軟な適用力が要求されることから、組織的な支援も必要だが、なかなか得られていないのが現状。
- ・学生同士でファシリテータ役を交替させながらグループワークを行った事例では、議論をボードに貼って交わすことにより、視覚的(みえる化)な議論となりうまく機能した。
- ・大人数クラスにおいて事前・事後学修を課しているが、人数が多い故に結果を学生個別に見るのは困難でアクティブラーニングが至難なものとなっている。
- ・現状、大人数クラスにおいてはアクティブラーニングを十分に体験して卒業する学生がいる一方、やらないまま卒業する学生がおり、アクティブラーニングにおけるマネジメントは非常に難しい。
- ・アクティブラーニングの具体的な事例・経験等が紹介された。
ゼミにおけるバーチャルカンパニーを企画立案し学ばせる事例、ゼミにおいて協働しない環境を作っておこなわせているアクティブラーニング事例、質問に答えると点数を与える等、学生を授業に能動的に取り組みさせる工夫、オンデマンドによる事前学修の効果。
- ・グループワーク、グループディスカッションにおいて、学生が他の学生にもものすごく配慮する傾向があり、学生が自分自身で自分なりの役割でそれに貢献する場を作らないとうまく行かない。
- ・本試験の前に模試をすると学生が来るようになった事例について、今の学生は勉強の仕方を知らない

いため、解き方/試験対策を教えてくれる勉強の方法に慣れ親しんでいるからではないかとの意見が出された。

- ・これまでの意見を5つのテーマに整理し、意見(感想)が出された。
 - ① ファシリテータの養成：
現状、ファシリテータの定着は難しい問題だが、「ネット上でのファシリテータの活用」は興味深い。
 - ② 知識の定着を目指したアクティブラーニング：
課題シートや模試活用など色々な先生方の工夫、ノウハウはネット上でもっと活用できるはず
 - ③ 社会や産業界との連携
 - ④ 全学的なFD：学生に対する本当の質保証の観点から必要
 - ⑤ オンデマンドコンテンツの作り方：ノウハウ、クオリティ、ライブ授業への効果
- ・「学位プログラムのチャレンジ」の議論が欲しい
教員のテリトリーに依る「教員本位の授業」ではなく、教員が力を合わせ「学生本位の授業」を作り上げることができるのではないか。
- ・大学で足りないのはカリキュラムポリシーではないか。
- ・横浜国立大学では、学修成果の可視化、教育課程の体系化、教学マネジメントの確立の第1段階は終わり、第2段階として学位プログラムを考えており、先生方の教育内容の可視化を検討している。私立大学はもっと自由度を持った教育ができるはずなので、思い切った授業を考えて欲しい。
- ・短期大学においては、平成31年度に開設予定の専門職業大学への危機感があり、教員こそ現場をらなければならないという、教員が学生と共に学ばなければならない問題に直面している。

3. 対話集会について

今回の委員会では、対話集会の内容/プログラムを決定したい。

テーマ(案)として

- (1). (ICTを使った)反転授業のやり方
予習させた後、対面の授業の中で、どうやって学修したところを確認させ、議論させる中で知識の定着を図るか
- (2). 分野の壁を越えた学び作り
学位プログラムのチャレンジ
- (3). (ネットによる)ファシリテイト
対面ではなく、ネットを使ったICTを使った同期/非同期のファシリテイト
- (4). 全学FD
強制力、強制力の持たせ方や工夫

4. 次回委員会

各委員に9/17(土)と10/1(土)のご都合をネットで伺うこととなり、

その結果、次回は**9月17日(土)16時~18時**に合同委員会を開催することとなった。

(開催場所：私学会館アルカディア市ヶ谷 7階予定)